

特集

第10回 全国水源の里シンポジウム

水源の里が創る 新しい時代

【取材・文：白波瀬聰美】



開会のあいさつをする山崎善也綾部市長

綾部市が全国に先駆け「水源の里条例」を制定し、活性化の取り組みを始めて今年で10年目を迎えました。この記念すべき年に、全国各地から約900人が集い「全国水源の里シンポジウム」を開催。「水源の里」発祥の地で、これまでの10年間の取り組みを振り返るとともに、これから10年に向けての課題や方向性について議論しました。水源の里の歩みとともに、第10回大会の模様をリポートします。



会場には全国から約900人が訪れた



特別表彰を受ける綾部市水源の里連絡協議会会長、酒井聖義さん

限界集落から水源の里へ

10年前は廃村寸前。誰もが「もう遅い」「もう無理や」とあきらめかけていた。過疎高齢化が進み、集落の存続自体が危ぶまれる地域は「限界集落」と称され、全国的にも消滅危機がささやかれる。そんな中、一歩前へ踏み出したのは、人里離れた山奥に暮らす住民たちの「おらが村を絶対に消滅させまい」という強い思いだった。

その思いを後押しすべく、綾部市は平成18年に「水源の里条例」を制定。マイナスイメージの強い「限界集落」という呼称をやめ、由良川源流近くの地域への愛着と将来への希望を込めて「水源の里」と名付けた。基本理念は「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。疲弊する中山間地域の課題を、都市住民にも理解と協同を求める趣旨とし、その再生策を全国初の条例化によって打ち出した。それはまさに、官民一体となって集落の消滅危機に立ち向かう決意表明だった。

住民の声をもとに集落ごとの課題を把握し、それに対する具体的な解決策に取り組む。市営住宅の

新設や携帯電話の利用圏外解消、インターネット用の光ファイバー網整備などの生活基盤を充実させるハード面の支援とともに、地域資源を活用した特産品の開発・商品化、都市部から人を呼び込む農業体験、伝統芸能の復活・継承など、ソフト事業にも注力した。

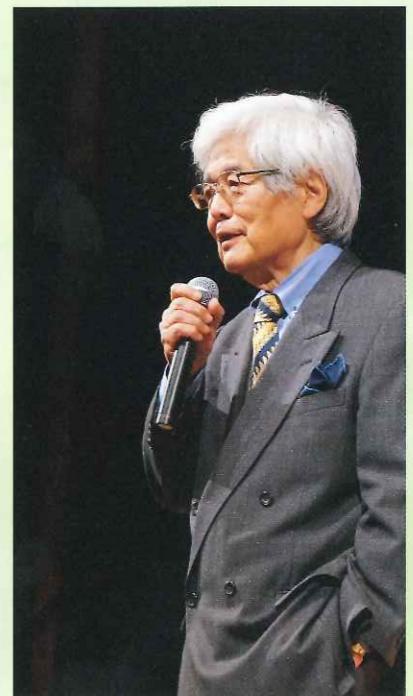
身の丈にあった地道な取り組みは、同じ悩みを抱える自治体を中心

心に共感を呼び、平成19年には「全国水源の里連絡協議会」が発足。現在では170の市町村が参画し、各地から視察訪問や多くのマスコミからも注目を集めなど、確かな国民運動へと発展を遂げた。

違いのわかる感性を磨け

「全国水源の里シンポジウム」は、平成19年綾部市のイニシアチブで開催した第1回以降、協議会に参画する自治体を会場に毎年続けられ、地域活力が低下した集落の維持・再生について考えてきた。10回目となる今回のテーマは「水源の里が創る新しい時代」。開会式典では、山崎善也綾部市長が「今一度、原点に戻って、水源の里の魅力と連携の必要性を確認し合い、次の世代につなげるための記念日となることを期待している」とあいさつ。続く特別表彰と全国水源の里フォトコンテスト表彰式の後、東京大学名誉教授の養老孟司さんが「今を幸せに生きる～これからの地域の在り方」を演題に基調講演を行った。

養老さんは、現代社会が都市化、



基調講演する養老孟司さん